

義務教育学校教職員アンケート結果

□アンケートの対象 福山市内の義務教育学校に勤務する校長及び教頭並びに在籍2年目以上の教職員（非常勤を除く。）／勤務経験のある教職員（対象者76人）

□アンケート集計期間 2025年（令和7年）5月23日（金）～同年5月29日（木）

□アンケート回答状況 鞆の浦学園 22人／35人中 回答率62.9%

想青学園 32人／41人中 回答率78.0%

合計 54人／76人中 回答率71.0%

※どちらにも勤務経験のある場合は、直近の勤務校に含む

□参考（学校規模） ・鞆の浦学園（2019年度開校 児童生徒数197人）

・想青学園（2022年度開校 児童生徒数542人） ※2025/5/1現在

■義務教育学校の良さ

1.（教育内容の充実_小中一貫教育の推進）

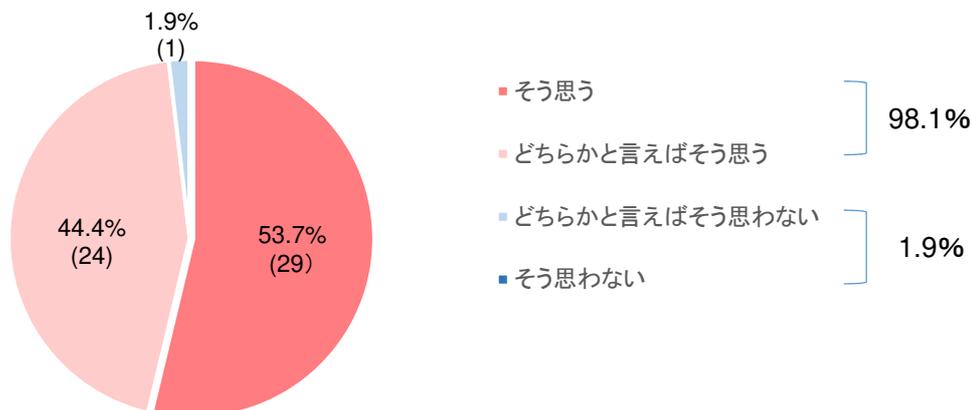
系統性や連続性を考慮したカリキュラムの編成や指導を行うことができる。

1年生からの英語学習、前期課程の教科担任制、後期課程のチーム・ティーチングなど、学校の実態に応じた取組ができる。



2.（教育内容の充実_柔軟なカリキュラムの編成）

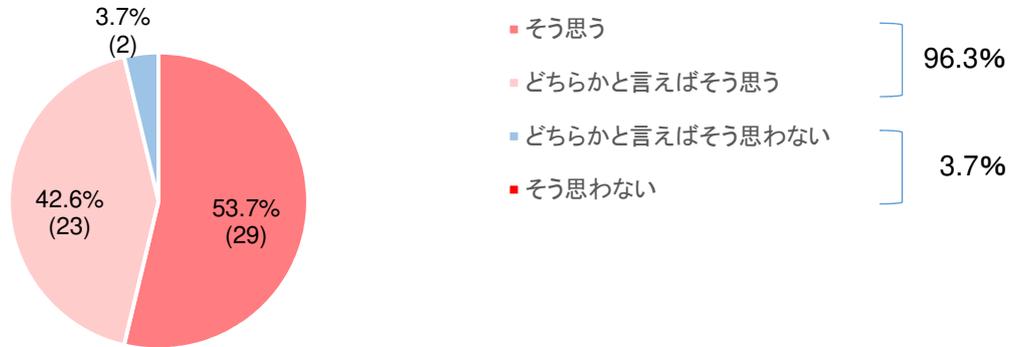
学校独自の新教科（「鞆学」「SOSEI学」）を創設でき、小中の枠を超えた探究学習や教科横断的な単元など、9年間の学びをつなぐカリキュラムが編成できる。



■義務教育学校の良さ

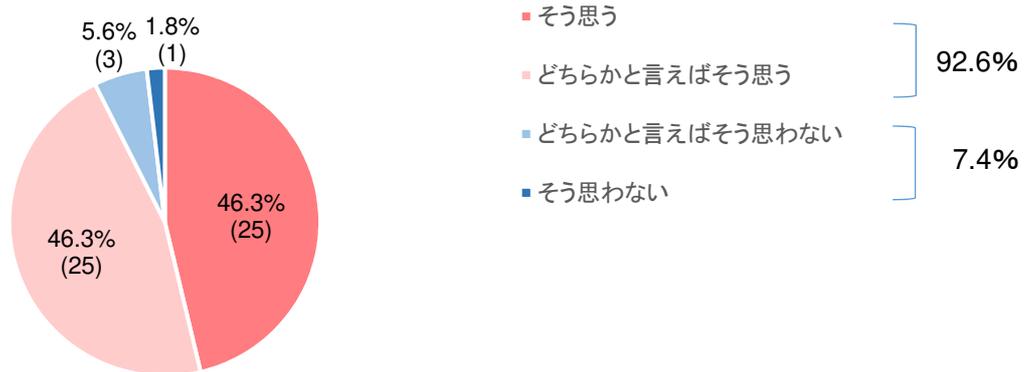
3. (教育内容の充実_個に応じた指導・支援)

一つの教職員組織のもと、緊密に授業や児童生徒に係る情報共有をすることで、個に応じた指導・支援を継続的に行うことができる。



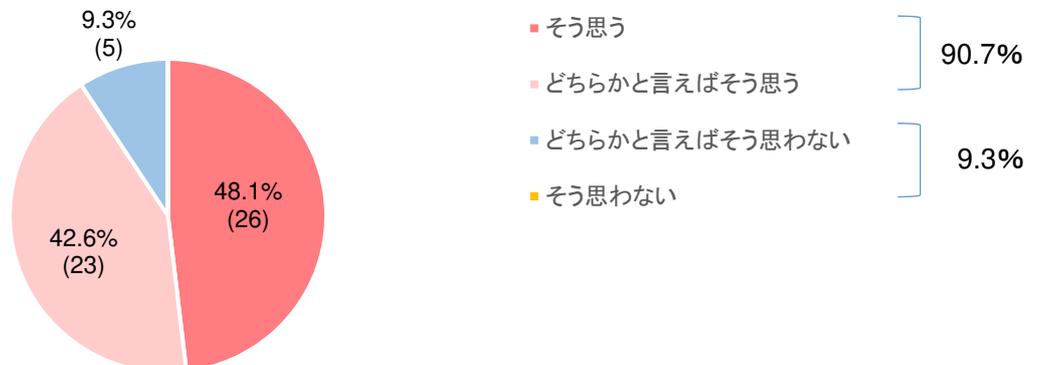
4. (児童生徒_日常的な異学年交流)

異学年交流により、上級生は下級生の手本になろうとする意識や優しさが育ち、下級生は上級生に対して憧れを抱くなど、相互により効果が生まれる。



5. (児童生徒_中1ギャップの緩和)

学習内容や指導方法等を前期・後期課程の教職員が共有することで、前期課程から後期課程への接続を円滑にできる。

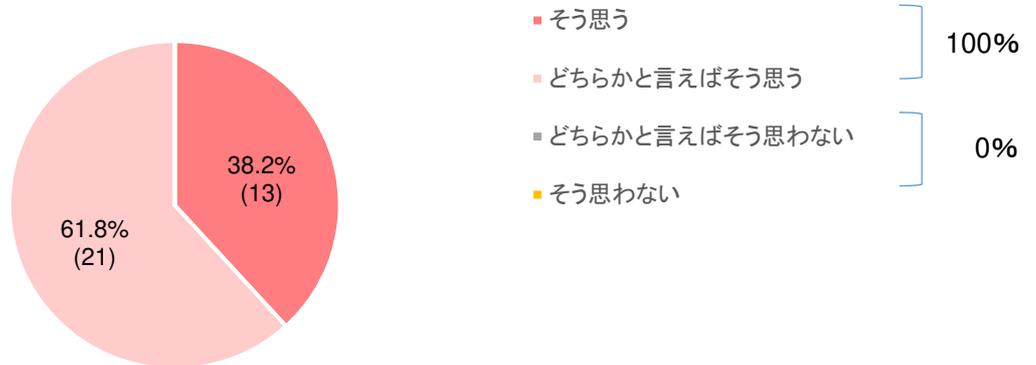


■義務教育学校の良さ

6-1. (教職員_授業参観や研修を通した学び合い)

《前期課程の授業を担当している人》

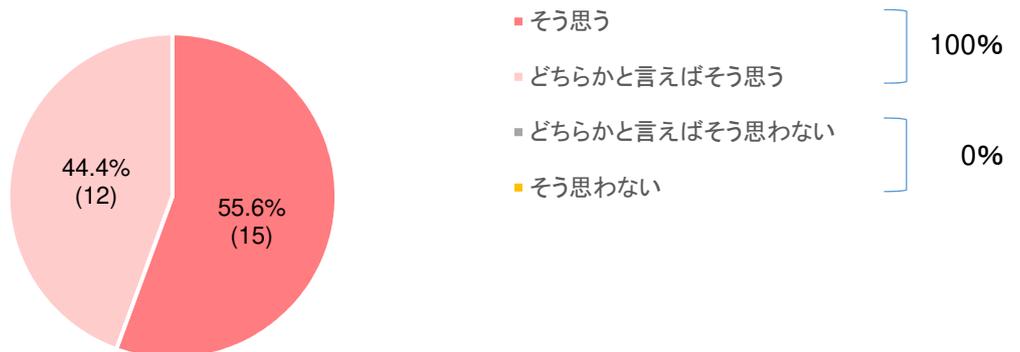
後期課程の専門性を活かした指導を取り入れることにより、前期課程での発展的な指導が充実する。



6-2. (教職員_授業参観や研修を通した学び合い)

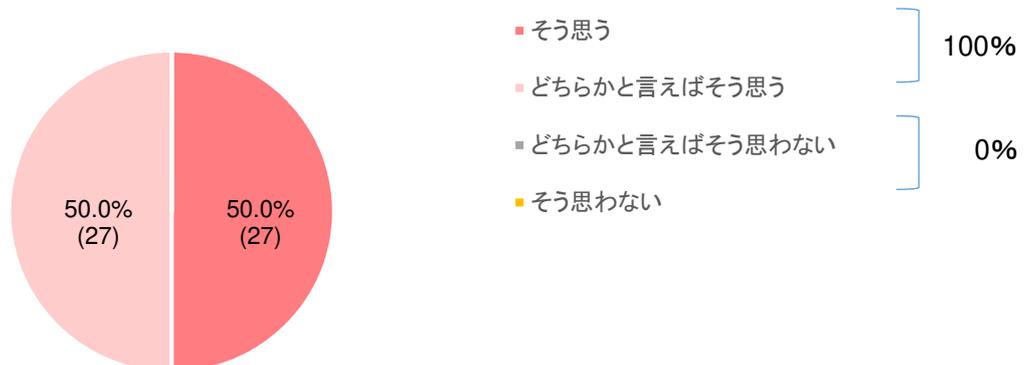
《後期課程の授業を担当している人》

前期課程の学習状況を知ることにより、後期課程での教科や単元のつながりを意識でき、指導が充実する。



7. (家庭_9年間を通した保護者との連携)

9年間の成長を見通しながら学校と家庭が連携し、児童生徒の実態を踏まえた取組を進めることができる。



■義務教育学校の良さ

8. その他、義務教育学校の「良さ」について感じていることがあれば、具体的に記載してください。（記述）

【主な意見】

教職員体制

- ・異校種の教職員が共に働くことで、良さを認め、高まり合う教職員集団になっている。
- ・全ての先生が、1年生から9年生までの全ての児童生徒に、自分の学校の子どもたち」という意識で接することができることが素晴らしいと感じる。義務教育を終える9年生の姿に、全教職員が関わっているという実感は、他では味わえない。
- ・一人の校長のもと、ぶれることなく9年間の継続した取組が実現できると考える。
- ・前期の教員が後期の教員の進路実現に向けた責任、覚悟や成績管理・事務処理等を見ることで子どもたちに力を付けることへの意識を高めたり、後期の教員が前期の教員の丁寧で工夫された掲示物や子どもへの手厚い関わりを見ることで学習環境や傾聴の大切さに気付かされたりしていた。
- ・中学校の先生に授業を参観してもらい、アドバイスをいただいたり、教材研究を共に行ったりすることができる。小学校の先生と中学校の先生がいるので、様々な見方考え方ができて勉強になる。
- ・教頭が2人在籍することで、相談しながら、校務を円滑に推進できる。
- ・前期課程で後期課程の教員が専科を行うこと、後期過程に前期過程の教員が部活指導することで、働き方改革が進んでいる。

指導・支援

- ・義務教育9年間を見通した系統的な学び・指導を実践することができる。
- ・特に生徒指導では、前期課程の段階から人間関係を築くことができ、指導に深みをもたせることができた。
- ・学習面でも発達面でも、9年間の成長の見通しや過程を教員として学ぶことができる。
- ・9年間、子ども一人ひとりの特徴や背景などを知った上で関わるができる。
- ・9年間の児童生徒の姿や卒業後の姿を見ることができ、今の時点でここまで力を付ける必要があると明確に考えることができるようになった。保護者とも、先を見据えながら話ができている。
- ・あらゆる部分において、スムーズな連携ができるのは良さだと思う。

児童生徒の姿

- ・中1ギャップがほとんどなく、生徒も安心して生活できているように感じる。体育祭やその他の行事など前期後期で協力して行う行事も多く、後期の生徒は手本になろうと頑張っている。
- ・9学年が一つの学校で学び、一緒に取り組む姿はとても良い。9年生が小学生（低学年）と一緒に何かをしている風景は、義務教育学校ならではの風景だと感じる。
- ・9年生と1年生が遊んだり、放課後に8年生と2年生がサッカーをしていたりと、子どもたちが遊び合い、学び合い、助け合える環境が自然にできている。
- ・様々な行事を前期・後期合同で行うので、後期課程の子どもたちは通常の学校よりも多くの幅広い学年の児童生徒をまとめることになるため、良い経験を積むことができている。
- ・異学年交流をすることで、小学生は中学生の先輩の姿を見て憧れていた。
- ・後期課程のレベルの高い美術の作品や独自教科の発表などを前期課程が目にする事ができ、ゴールイメージをもちやすくなる。
- ・学年を超えたつながりができやすい。
- ・後期課程の部活動に、前期課程の高学年から参加することで、活気と継続性が出ている。

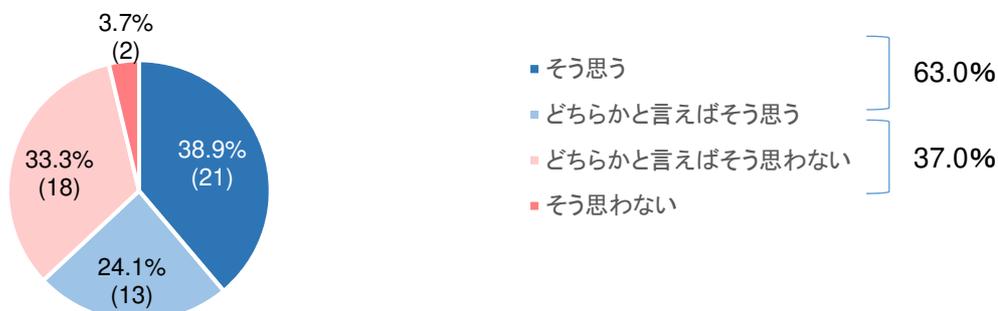
地域との連携

- ・授業に係る地域連携が図りやすい。
- ・独自教科では、校区内の様々な地域に出向いた取組により、地域とのつながりを深めている。

■義務教育学校の難しさ

1-1. (児童生徒)

小学校から中学校への進学がなく環境が変わらないため、児童生徒が気持ちを切り替えることが難しい。



1-2. (「そう思う」・「どちらかと言えばそう思う」を選択した場合)

各校や個人で解決するために取り組んでいることがあれば記載してください。(記述)

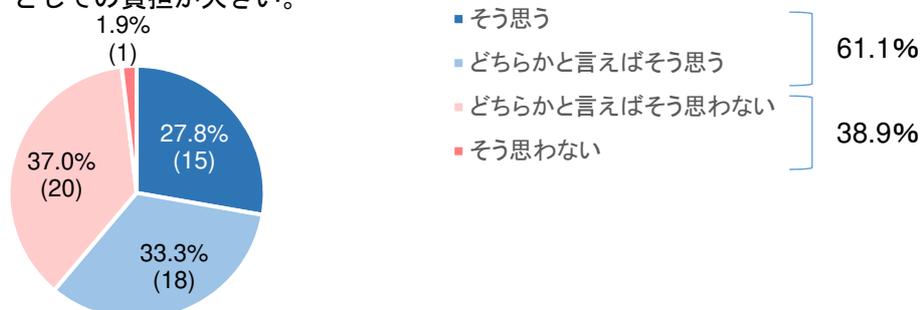
【主な意見】

- ・制服や教科書、部活動などの環境が変化するため、切り替えはできている。
- ・6年生時には子どもたちの気持ちを後期へ持っていくように促すことが必要だが、制服や教科担任制などの環境が変わることで切り替えることができている子が多いようだ。
- ・制服が変わることは生徒にとって大きなステータスだと本人たちが言っていたので、4月の7年生には意識的に後期生になったという自覚を持てるような声かけをしている。
- ・前期後期で分けるのではなく、前期、中期、後期と段階を区切り、部活への参加、委員会の責任など、中期から中学校の内容を徐々に取り入れていくようにした。
- ・前期の先生からの声かけを日常的に行う。
- ・6年生を担任したときには、授業等での学習の仕方の違いや、後期で頑張りたいことを明確にして進級するよう、繰り返し声をかけた。常に後期課程のことを伝えていた。
- ・勉強の仕方を丁寧に確認する。
- ・卒業後の目標や自分の姿を考えさせ、進路についての取組をしていく。
- ・小学校(前期)の延長の意識でいる生徒が多いため、中学校は高校進学に向けての進路のこともあるため、学習面、生活態度などの話を生徒に話すようにしている。
- ・後期課程のルールを意識して活動するように学年や授業を通して話をする。
- ・後期課程の難しさや頑張った方がいいことを生徒の声をもとに前期課程に伝えるようにしている。
- ・「自立&自律」ということをより丁寧に指導することを心がけ、保護者にも最初の懇談でそのことをお願いする。
- ・7年生の段階から進路を意識させることで、前期課程からの意識のステップアップを図っている。
- ・前期と後期では変わってくるという話を授業で行なっている。
- ・中学校の3年間は社会へ出る準備期間であること、今後の進路は自分で切り拓かなければならないことを節目ごとに伝えている。

■義務教育学校の難しさ

2-1. (児童生徒)

6年生に、前期課程最高学年としてのリーダーシップを育てにくい。
 または、9年生のリーダーとしての負担が大きい。



2-2. (「そう思う」・「どちらかと言えばそう思う」を選択した場合)

各校や個人で解決するために取り組んでいることがあれば記載してください。(記述)

【主な意見】

6年生のリーダーシップの育成

- ・6年生に向けて最高学年だという話をしている。
- ・6年生のリーダーを育てるため、意図的な取組を行う。
- ・前期課程の活動で、リーダーとして活躍させている。
- ・1年生の手伝いなどは6年生がすることで上級生の自覚をもたせる。また、プール掃除は6年生が主体となって動いている。
- ・6年生が独自で1年生とのレクリエーションを仕組むなどして、リーダーとしての自覚をもたせるための取組をしている。
- ・生徒会に6年生も参加して、全校の前に出る経験を積んでいる。
- ・一部行事で6年生をリーダーとして動く場面を設定している。

9年生のリーダーとしての負担

- ・9年生の負担が大きくなるということはない。
- ・行事の準備等を9年だけでなく、6年生にもさせている。
- ・リーダーを多めに配置することにより、役割分担をして一人へ負担が重ならないようにしている。
- ・教員がサポートする。
- ・委員会には5年生から入っており、9年生には人を動かすこともリーダーの仕事だと伝えている。

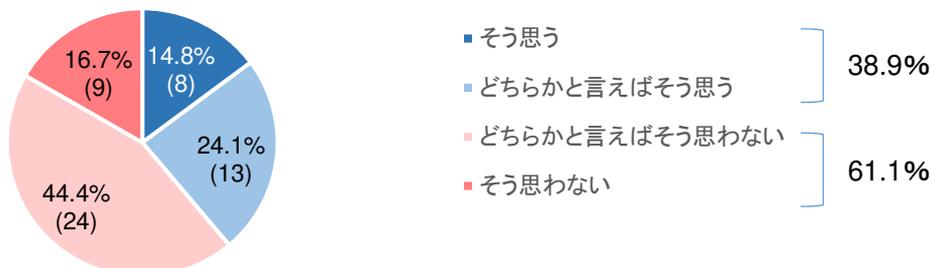
学年によらないリーダー性の育成

- ・学年にこだわらずリーダーになれる学年や個がリーダーになる風土を作っている。
- ・学年を「1年～4年」「5年～7年」「8年・9年」の3部に分けて、それぞれの区切りを明確化することで、子どもたちが気持ちの切り替えを意識できるように教員がファシリテートすることが大切だと考えている。そうすれば、4年と7年生をリーダーとして育てることができる。また、児童会・生徒会にあたる組織の会長・副会長をはじめとする執行部や委員会の委員長などは、7年生までで組織して、8年生・9年生は、見守ったり、最低限の助言をする程度で、頼れる先輩として憧れの対象になればよいと考えている。

■義務教育学校の難しさ

3-1. (行事)

全校行事、前期・後期別行事など、学校行事の持ち方、内容の検討が難しい。



3-2. (「そう思う」・「どちらかと言えばそう思う」を選択した場合)

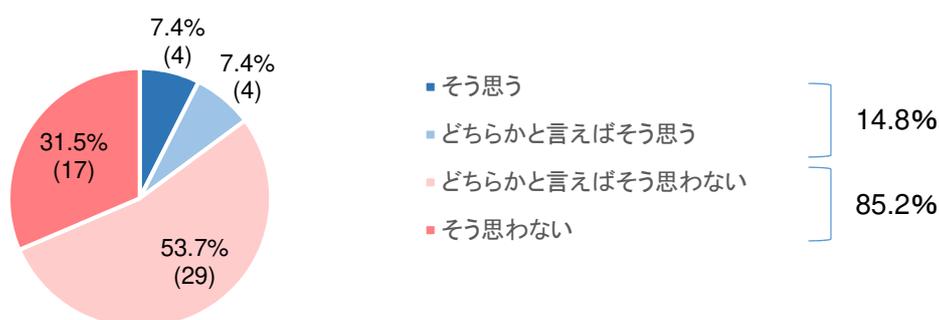
各校や個人で解決するために取り組んでいることがあれば記載してください。(記述)

【主な意見】

- ・誰でもできる、かつ楽しめるものを考える。例：スポーツ大会でパラスポーツを取り入れることで、誰もが参加でき、楽しめるようにしている。
- ・1年生と9年生が一緒に参加する際、言葉の言い回しや内容を精選している。
- ・必要な行事かどうかを吟味して、精選している。
- ・前期・後期のそれぞれの先生に確認しながら検討している。
- ・学習発表会は、後期課程の行事との兼ね合いや気候を踏まえ検討している。
- ・前期課程を意識した活動を行うようにしている。
- ・職員室において、前期課程の教員との会話を大切にしている。

4-1. (教職員)

前期課程と後期課程の教職員には小・中学校の文化の違いがあり、お互いを理解し合うことが難しい。



4-2. (「そう思う」・「どちらかと言えばそう思う」を選択した場合)

各校や個人で解決するために取り組んでいることがあれば記載してください。(記述)

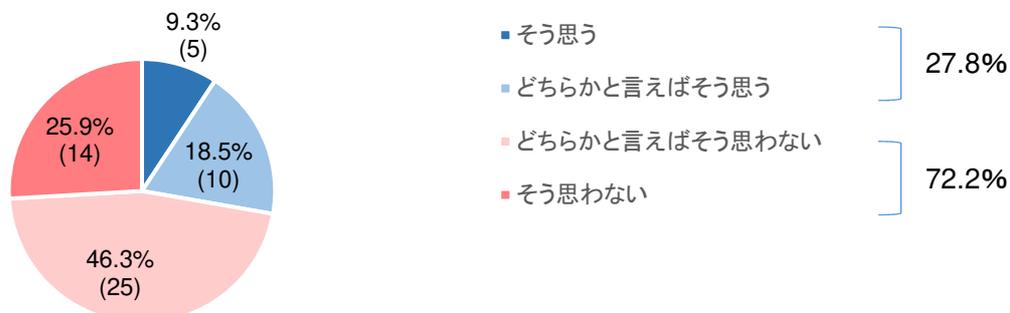
【主な意見】

- ・転勤してきたばかりの最初の職員会議で、文化の違いを職務の中に入れないよう校長先生が説明されている。(創設当初から)
- ・理解し合おうと思いつながらの日々だが、根底にあるものまでの理解にはまだ至っていないと感じる。小学校と中学校の文化の違い(生徒指導、教科指導)が大きいため、義務教育学校に突然に入ると慣れるのにも時間がかかり、難しさを感じることは多々ある。慣れてきたころに異動という現実もある。
- ・お互いの不満を聞くこともあるが、話を聞いて調整するよう努力している。

■義務教育学校の難しさ

5-1. (施設)

授業で、体育館や特別教室を使用する際の調整が難しい。



5-2. (「そう思う」・「どちらかと言えばそう思う」を選択した場合)

各校や個人で解決するために取り組んでいることがあれば記載してください。(記述)

【主な意見】

- ・ 時間割表に見える化をし、円滑に調整できるようにしている。
- ・ 担当者が、よく練ったカレンダーを作成している。
- ・ 特別教室予約用のスプレッドシートを活用している。
- ・ コミュニケーションを取って話し合い、互いに譲り合いをする。

■義務教育学校の難しさ

6. その他、義務教育学校の「難しさ」について感じていることがあれば、具体的に記載してください。
(記述)

【主な意見】

指導における難しさ

- ・前期後期で指導の統一が難しい。
- ・小学校の先生が中学校でどのように教科指導したらよいか難しい。
- ・発達段階の違う集団をどの方向に伸ばすのか、意識統一が必要だと感じる。中学生がもう一段階成長するために後期課程での意識改革をどのようにすればよいのかが難しい。
- ・様々な場面で「難しい」と感じる場合、教職員の相互理解と見方や考え方を少し変えるだけで新たな方向性が見つかることが多かった。柔軟な考え方で子ども達を育てることが大切だと実感している。
- ・子どもの発達段階を考えると小学校・中学校のやりかたというのがあるのは仕方ないと思う。それを考えながらの調整が難しい。
- ・規律ある雰囲気づくりが前期課程と後期課程で差がある。教員の意思共有が必要だと考える。

児童生徒の姿から感じる難しさ

- ・中だるみをする児童生徒が多くいる。
- ・人間関係が崩れると立て直すきっかけがなかなかない。
- ・長く一緒にいるので、保護者も子どもたちも気持ちの切り替えが難しい。
- ・少人数の義務教育学校は、部活動が持続可能ではない。

合同授業・行事等の難しさ

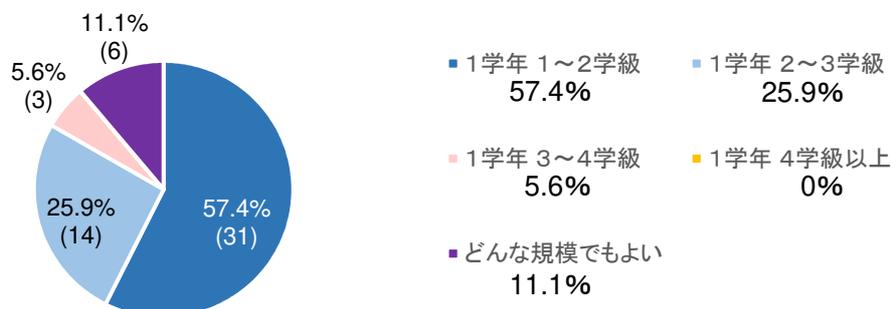
- ・中学生だけであれば簡単に集めて話ができることも、小学生と一緒にいる場合は時程の調整や話す内容をいつもより丁寧に考える必要がある。
- ・前期・後期一緒にやろうとしても実際難しいと感じることがある。
- ・1年生と9年生で体力差がかなりあり、やる事が限定されることもある。
- ・授業の間の休憩が後期課程に合わせているため、大休憩や昼休憩が短く、十分外で遊べる時間が少ない。
- ・担当ではないが、時間割の調整に時間がかかっているように思う。
- ・前期と後期どちらとも立場や気持ちがわかるだけに、どちらにも納得してもらえるように考えて提案をしなければならず、創設以来毎年、ほぼ全ての提案内容を改善したり考え直す作業を繰り返している。これでいけそうだなということが増えてきているが、ここに至るまでに、かなりの労力を要した。
- ・学校行事など様々な活動を通じて異学年の交流や学年の縦割り活動などを行っているが、1年生のような低学年と9年生の学年では発達段階に差があるため、様々な配慮が必要となる。

その他

- ・特に難しさを感じることはない。
- ・児童生徒数に応じた人員体制が必要である。

■義務教育学校の規模

1. 望ましいと考える義務教育学校の規模について、選択してください。（一つのみ）



2. 学校規模について、上記のように考える理由（記述）

【主な意見】

1 学年 1～2 学級

- ・大規模になればなるほど、児童生徒の実態に合った前期課程と後期課程共通の取組を立案・実施することが大変である。
- ・クラス数が多すぎると、リーダー学年が下級生をまとめることが大変になる。
- ・前期高学年が一番育つときに、前期・後期合わせると人数が多いことで、学年に応じた活動や委員会等がやりにくい。活動の場が少なくなり、意欲の減少につながってしまう。
- ・学級が多いと児童生徒との関係が結びにくいと思う。今は、関わりのない学年の生徒でも声をかけることができ、関係をつくることもできることもある。
- ・学級数が少ないほうが、異学年での交流が増え、義務教育学校ならではの良さを育むことができる。
- ・児童生徒一人一人に目が届きやすく、教員との関わりも密になる。
- ・少人数の方が9年間の成長をしっかりと見通しながら、児童生徒の実態を踏まえた取組を進めることができる。
- ・こどもたちの人間関係のことを考えると、クラス替えができるくらいの規模がいいと思う。

1 学年 2～3 学級

- ・1学級のみだと9年間環境が変わらないため、2学級程度の小規模校が適当である。個をしっかりと見ることができ、クラス替えで環境も変えられ、児童生徒も切り替えができると思う。
- ・単学級の場合、クラス替えがなく、人間関係の調整や行事に難しさが出るため、2学級以上はあった方がよい。
- ・過去の経験から単学級の学年があると、担任の負担が大きくなる。学年の業務だけでなく単学級イコール学校全体の職員数が少なくなる。
- ・学年間での連携が取りやすい。
- ・規模が大きくなりすぎると、全体的な把握が難しくなり、個々の活躍の場面も制限されてくる。
- ・これ以上だと人数が多すぎて、行事等をするにあたって時間や内容の検討が難しい。

1 学年 3～4 学級

- ・クラス編制における生徒等のバランスを考えると、3学級以上が望ましい。
- ・児童生徒数が多いと教職員の人数も増えるため、仕事を分担して行える。
- ・生徒・保護者ともに人間関係が難しい場合、1～2学級だとどうにもならないことがある。それが9年間続くのはなかなか厳しいものがあると思う。

どんな規模でもよい

- ・運動場や特別教室など、規模に応じて環境が整っていればよいと思う。
- ・人員やシステムなどが整っていれば、どんな規模でも対応できる。

■義務教育学校の規模

3. 学校全体の児童生徒数はどのくらいが望ましいか、ご意見があればお願いします。
(例) 1, 000人を超える規模は大きすぎる など

【主な意見】

- ・ 200～300人
- ・ 全校児童・生徒で500人くらいが最大だと思う。
- ・ 500～600人程度
- ・ 700人くらいまで
- ・ 800人を超えると規模は大きすぎる。
- ・ 前期・後期合わせて800人くらいで、一クラス30人程度であれば全員をしっかりと見ることができると思う。
- ・ 学級数が3と考えて、各学年100人程度、全校900人程度が望ましい。
- ・ 1学年1学級だと一つの家族のような雰囲気、まとまりを感じた。
- ・ 1学年2学級以上はあった方が良く思う。
- ・ 3学級編制できる程度の人数が望ましいのではないかと。